

「GO」窪塚洋介、柴咲コウ、山崎努、行定勲(監督)、金城一紀(原作)

平成13年10月15日発行第1342号 (月2回1日15日発行)  
通巻2156号 昭和25年11月25日第3種郵便物認可

# キネ旬報

KINEJUN  
No.1342

# GO



**総力特集** 速報! 第14回東京国際映画祭ガイド

**企画特集** アンジェリーナ・ジョリー

**作品特集** 「恋する遺伝子」「ターン」「陰陽師」「ショコキ!」

**フロントインタビュー** 石原慎太郎

INTERVIEWS

窪塚洋介、マギー、野村萬斎、米倉涼子、  
加賀美早紀、デイヴィッド・ドゥカブニー、w-inds.

10  
2001  
10月下旬号



### 窪塚洋介

インタビュー 金原由佳 撮影 加藤義一

### むちゃくちゃ嬉しかった

10.20 全国東映系ロードショー

キネマ旬報 2001年10月下旬号 No.1342

原簿/窪塚洋介 (YOSUKE KUBOZUKA) 脚本/高橋昌九郎 監督/行定勲  
主題歌/「等々力めか」-thema of GO- | The Kaleidoscops (Contingents)  
製作「GO」製作委員会:東映 STARMAX テレビ東京 東映ストア TOKYO FM 配給/東映

これまで映画に出演してきたが、『池袋ウエストゲートパーク』や『ストロベリー・オンザ・ショートケーキ』など話題を呼んだテレビドラマでの圧倒的な存在感に比べて、どこか見劣りする役柄だったことは確かだ。しかし、今年は堤幸彦監督作「溺れる魚」で女装癖のある刑事という癖のある役を披露してから3月は森淳一監督の「Laundry」で頭に傷を持つ青年役、夏は行定勲監督の「GO」で在日韓国人の青年役、秋は曾利文彦監督の「ring pong」で卓球一筋の熱血高校生と、一筋縄で行かない役に続けざまに挑戦している。窪塚洋介にとって今年はまだに攻めの年、映画の年だ。

「去年までは、映画であろうと、ドラマであろうとそれは自分にとっての作品で、やるべきことは何一つ変わらないうちで思っていた。けれど、『GO』に入ってから、映画はテレビやコマーシャルと全然違う。映画は観客がお金を払わなきゃ見られないってことをすごくリアルに感じたんですね。やっぱり映画は映画なんだと当たり前の事に、気づいたという感じですよ」

この発言には劇場に観客を引き込むべく主役としての自覚を読み取ることができる。それは撮影現場でも感じられることだった。六本木のクラブで、級友の誕生パーティの場面を撮影した日のこと。全行程を終えた彼は1000人に及ぶエキストラに「お疲れ様でし

た。完成したら映画を見てく  
ださい」と挨拶と握手を交わ  
していた。シャイな俳優が多  
い中、窪塚洋介は自分の意見  
を発信することにもかなり熱  
心だ。「GO」は直木賞を受  
賞した金城一紀の同名の小説  
を映画化したもので、窪塚は  
朝鮮籍から韓国籍へと変えた  
父親を持つコリアン・ジャパ  
ニーズの杉原を演じている。

杉原は中学時代を民族学校で  
過ごす、高校は日本人の通  
う学校を選ぶ。本人は「国籍  
など関係ない」と自問するが、  
級友はそう見ない。そんな境  
遇の青年を演じることへの戸  
惑いやアプローチについて語  
りだすと、とまらなくなって  
しまう。製作記者会見では10  
分にわたって熱弁した程だ。  
「今回、一番悩んだのは杉原  
がコリアン・ジャパニーズで、  
僕は日本人だということです。  
埋めようもない事実でした。  
差別の問題を自分でどこまで  
完璧に理解したら合格になる  
のかなんて話じゃないけれど、  
本は在日韓国人を扱ったもの  
から、「民族から読みとく」ア  
メリカ」(松尾式之・講談社  
選書メチエ)やキング牧師や  
マルコムXの自伝、「M/世界  
の、憂鬱な先端」(吉岡忍・文  
藝春秋)や一闇に消えた怪人

グリコ・森永事件の真相(一)  
橋文哉・新潮文庫)を読みま  
くりました。自分を取り巻く  
日本社会がどういうものなの  
か、システムのゆがみは何な  
のかを知ることが、そのまま  
杉原に近づく大きな手がかり  
でした。物理的に難しい部  
分もありました。杉原は幼い

ときから親父からボクシング  
を習っているという設定だっ  
たのでジムにも通ったんです  
けど、7年やってるんだっ  
たら7年やってる体の方がよ  
っぱりリアルですよ。でもそ  
れは無理な話。結局、限られ  
た時間の中でどこまで役を埋



「GO」  
10月20日より全国東映系にてロードショー

- スタイリスト 坂崎タケシ
- アシスタント 佐藤哲夫
- ヘアメイク e.a.t...白石義人
- 衣裳協力 NUMBER (N)INE  
TEL 03 - 5793 - 3453

められるか、いつもそうです  
が『時間』に試されましたね  
杉原を少しでも自分に近づけ  
るために、高校時代の服は全  
て自前のもので揃えてみたり  
しました」

原作者の金城氏からは「ラ  
イ麦畑でつかまえて」など、  
青春を鮮やかに描いた小説を  
プレゼントされたが、「読んで  
いなかった」と言うところが  
彼らしい。しかし、映画は  
差別という繊細な問題に正面  
からぶつかりながら、初恋と  
いう普遍的な題材を軽やかに  
描いていて、『ライ麦畑』に  
通じる世界観を作り上げてい  
る。聞けば、撮影前に行定勲  
監督と鰻屋で「GO」をどう  
描いていくか話をしたと言っ  
たのが彼とGFの桜井との初  
体験の場面で、そこは一番  
生々しくやりたいって言った  
んです。彼女に言えずにいた  
自分の国籍を裸で告白する時

の独特の緊張感、空気感をい  
かにリアルに表現するかが僕  
にとってはとても重要だった  
だから、頭から通して演じさ  
せてくださいとお願ひしまし  
た。監督も最初からそこは切  
らずに撮るつもりでいたそう  
ですけど、撮った翌日に、僕  
が今まで撮って来た映像の中  
で一番きれいな画が撮れまし  
たって言うてくれて、それは  
むちゃくちゃ嬉しかったで  
す」

この映画のもうひとつの醍  
醐味は杉原とかなり強烈な個  
性の両親とのやり取りだろう。  
山崎努、大竹しのぶ扮する両  
親は複雑な生い立ちを背負う  
息子のために、ときには荒っ  
ぽい方法で生きる術を教え込  
む。そこには暗さは微塵もな  
く、痛いけれどだからとした  
明るさに満ちている。互いに  
逞しく向かい合う親子関係は  
羨ましくもある。

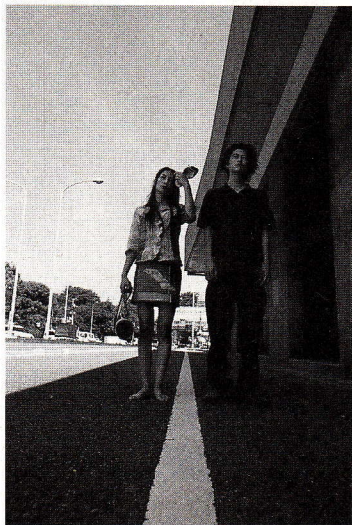
「大竹さんと共演して驚いた

のは、あんなにキャリアの長  
い人が本番前に毎回、本気で  
緊張していたこと。見ていて  
新鮮な気持ちになりました。  
山崎さんは撮影を通して、横  
顔が頭の中にこびりついてい  
る。やっぱりその人の生きて  
きた様が顔に出るんだなど感  
じましたね。嬉しかったのは、  
殴りあいのシーンを経験でき  
たこと。そのとき、打ち合わ  
せと違つて、金玉を殴られた  
んですよ(笑)。痛くてたまら  
なかったけど、おかげで迫力  
のある画を撮ってもらったと  
思います」

窪塚洋介の個性は飄々とし  
た外見からは窺えない内面の  
熱さ、若さゆえの青臭さ、初々  
しさだ。それが醒めた時代に  
心地よく響いてくる。この日  
本映画界を担う新しい個性を  
支えるべく、初々しい魅力に  
満ち溢れた「GO」の成功を  
願いたい。

## FACE 2001

くぼづか・ようすけ/1979年生まれ。  
95年にデビュー、「少年H」(99)「池  
袋ウエストゲートパーク」(00)「も  
う一度キス」(01)などのドラマで人  
気に。映画「溺れる魚」での演技も  
記憶に新しい。「Laundry」(ping po  
ng)が2002年公開予定。



今年を代表する傑作の一本になること必至の「GO」。窪塚洋介扮する在日韓国人高校生・杉原の青春を謳いあげたこの作品の中で、ラブ・ストーリーのパートをみずみずしく体現している相手・桜井役に抜擢されたのは、「バトル・ロワイアル」の熱演が今も記憶に新しい柴咲コウ。今回は、原作者・金城一紀の熱望によるキャストイングだったという。

「金城さんが、地元で偶然私とすれ違ったことがあったらしく、そのときから映画化するなら桜井は私に思っていたらいいなと思ってたみたいです。そのことを後で聞かされて、運命の巡り合わせって面白いなというか(笑)」彼女自身、依頼があったときは既に原作を読んでいたという。「私でいいのかなあっていうのが、そのときの本音でした。正直、桜井は自分に全然当てはまらないかと思ってたんですよ。もちろん原作を読んで共感する部分はありましたし、彼女の哲学めいたところとかも好きなんですけど、私と彼

女とでは表現の仕方も違うし……。ただ、いざ演じてみたら、全然普通の女の子なんだということに気づいたんです」

特にそのことを痛感し、役に入り込むひとつのきっかけとなったのが、杉原とホテルに入り、彼が在日であることを告白され、ショックを受けるシーンだったという。

「それまでは自分独自の世界を持ってて、またそういう見せ方をしてきたのが、実は幼い頃から中国や韓国の人と付き合っただけという教育を受けてきたことで「怖い」という反応を示してしまう。そこにはすごくギャップがあるし、結局は人から言われたことで洗脳されている。また、そのことで人を傷つけてしまうという、そんな落差や弱さから、桜井に入り込むことができたんです」

行定勲監督からは、絵コンテを見せてもらうなど、懇切丁寧な指導を受けた。

「やっぱり監督のイメージが一番大切だと思えますし、私自身が考えるというよりは考えさせてもらう方だし、ほどよい説明というか、心理的なこととか言っていただけなので、すごくやりやすかったですし、感謝しています。また窪塚さんは自分から役を作っていくタイプで、そこでもまた刺激を受けたりしましたね。台本を読んでも理解したと思っただけのようなことも、いざ現場で彼を相手に演じてみると、ガラリと変わったりするんですよ。本当に今回は、行定監督と窪塚さんのおかげで、桜井を演じられたような気がしています」

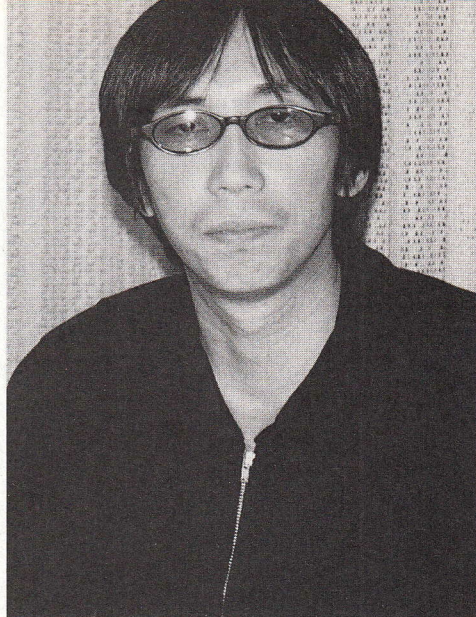
INTERVIEW

# 柴咲コウ

——— インタビュアー・関口裕子

しばさき・こう/1981年生まれ。CMやドラマで活躍した後、「東京ゴキウ」(00)で映画デビュー。「バトル・ロワイアル」(00)の演技で注目を集める。「化粧師 KE-WAISHI」、「サウンドトラック」が公開待機中。

運命の巡



新作「GO」を完成させた行定監督。彼は最初に原作小説を読んだ時、これを映画化するのには難しいと感じたという。

「知り合いのプロデューサーに『これは映画になるよ』と言われて。原作が直木賞を獲る前に読んでいました。アメリカ文学っぽい語り口で面白いとは思ったんです。ただ映画にして面白いと言っている意味は分からなかった。杉原という主人公が、僕にはかっこいいとは思えなかったんです。彼は無骨な男で、それが可愛い女の子と出会うことで浄化する話だと。無骨な男主演では、とてもメジャー会社の映画にはならない。在日韓国人のエピソードが沢山書いてあるけれども、それだけに焦点をあてるのも違う。やはりこの小説は、僕の恋愛に関する物語という部分が面白いわけですから。単純なボーイ・ミーツ・ガール映画にするには相当の演出力が必要だし。一体誰が監督するんだろうと思っていました」

その「誰か」が自分に回ってきた。

「今年のあたまにお話をいただいた時は、悩みましたよ。ただ、映画監督という職業をやっていくからには、オリジナルだけではなく原作ものもやれるようになりたい。だから今年は自分の業務内容として、原作ものだけやってみようと思ったんです。それと窪塚洋介君とは仕事をしてみたかった。僕が監督依頼

## INTERVIEW

# 行定勲

## 原作もの十窪塚洋介 それで決めた



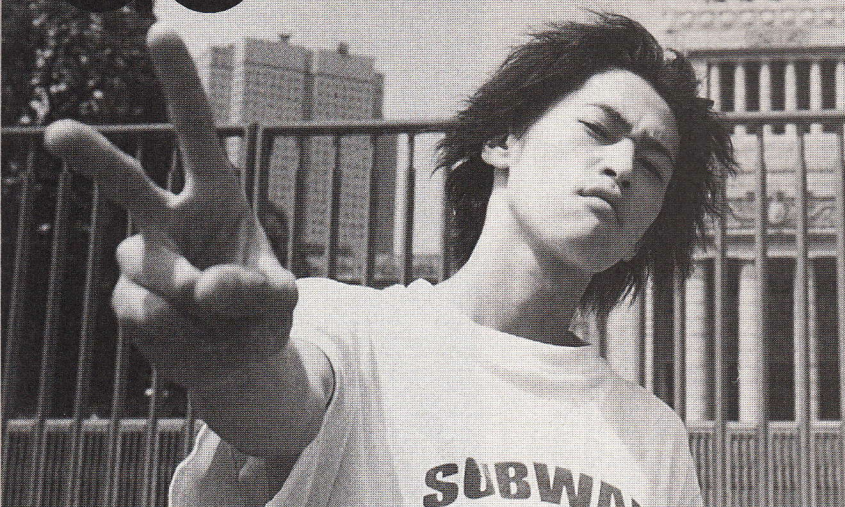
インタビューアール・金澤誠

ゆきさだ・いさお●1968年生まれ。岩井俊二、林海象監督作品の助監督などを経て、「OPEN HOUSE」で初監督。その後「ひまわり」(00)「閉じる日」(00)「贅沢な骨」(公開中)を撮る。現在「ロックンロールミシン」撮影終了。「カノン」の撮影待機中。

をうけたときには、すでに彼が主演だと決まっていたから。それで監督することにしたんです。僕が出したアイデアは、窪塚がやるんだって彼の杉原を見出そうと。僕の分析からいくと、彼は毎回役によって作り込んでいく技巧派。しゃべり方まで作っているでしょう。ここでは普段の彼と同じにしようと思っただけです。最初に彼と会って、いつもは役が自分に寄っていったんだろうけれど、今回は自分に役を引きつけてくれと言いました。そこで彼とは意気投合しましたね」

窪塚洋介はコリアン・ジャパニーズの杉原を演じるために、様々な文献を読み漁ったという。監督はコリアン・ジャパニーズに、どういう考えを持っていたのだろうか？

「僕は故郷が熊本なんです。それで子供の頃に在日韓国人の友達がいちたんです。彼とはよく遊んでいたんですが、地元で『ぼした祭り』というのがありましてね。これは加藤清正が朝鮮征伐をしたのを讃えた祭りなんですけど、子供は全員祭りに駆り出されるんですよ。在日の彼はその間学校を休んで、在日だ



ソードが沢山書いてあるけれど、それだけに焦点をあてるのも違う。やはりこの小説は、僕の恋愛に関する物語という部分が面白いわけですから。単純なボーイ・ミーツ・ガール映画にするには相当の演出力が必要だし。一体誰が監督するんだろうと思っていました」

その「誰か」が自分に回ってきた。

ということが広まってしまったんです。祭りの後、僕も彼と遊ぶと疎外されそうな状況があった、彼とは疎遠になりました。でも前から二人で、近くの湖にカルガモ狩りに行こうと約束していたんですよ。それを果たしようと待ち合わせをしたんですが、僕が遅れて行ったんです。待ち合わせ場所には、カルガモを獲るためのパチンコだけが置かれていた。僕はそのまま家に帰ったんですが、実は彼は一人で湖に行って水死体で発見されたんですよ。

析からいくと、彼は毎回役によって作り込んでいる。ここでは普段の彼と同じにしようと思っただけです。最初に彼と会って、いつもは自分が寄っていったらどうだろうけれど、今回は自分に役を引きつけてくれと言いました。そこで彼とは意気投合しましたね」

それは僕が初めて死というものと対面した瞬間でした。このことはいつか映画にしたいと思っただけです。この映画で杉原の親友ジョニールが、杉原に伝えたいことを言えないまま死んでしまうところがありますが、何かその感じが凄く良くわかるんですよ。僕はその頃からコリアン・ジャパニーズを差別することは馬鹿馬鹿しいと思っていたし、それになんかの意味があるのかと。同じ人間ですから。20世紀は、過去の戦争を引きずっていた時代だと思っただけです。でも21世紀はそれをリセットして、そんなこといいんじゃないという映画を作ったかった。「GO」は、そういう意味で打って付けの作品だと思いましたね」

映画の中では杉原が、日韓の壁を飛び越える心境になるまでにはプロセスがある。そのきっかけを作るのが、彼の心を奪う日本人女性・桜井を演じた柴咲コウである。

「彼女には、とにかく可愛い女の子でいて欲しかった。今まで柴咲がやってきた、強いソリッドな感じを全部なくして、これが等身大に近いんじゃないかという、匂いを出したかったんです。ただ柴咲は恥ずかしがり屋で、なかなか可愛くはやらないんです。それをこうして欲しいと僕が動きなんかも具体的に要求して、演じてもらいました」

そういう桜井の可愛さとは別の部分が出たのが、杉原が彼女に初めて自分がコリアン・ジャパニーズだとホテルで告白するシーン。「あそこはなんの注文も付けず、柴咲のやりたいようにやっていいよと言いました。ここで桜井が初めて杉原に自分のフルネームを教

ういう考えを持っていたのだから？」

「僕は故郷が熊本なんです。それで子供の頃に在日韓国人の友達がいましてね。彼とはよく遊んでいたんですが、地元には「ほした祭り」というのがありますね。これは加藤清正が朝鮮征伐をしたのを讃えた祭りなんですけど、子供は全員祭りに駆り出されるんですよ。在日の彼はその間学校を休んで、在日だ

える。そこでリハールサルの時に、彼女は泣いたんですよ。柴咲は「杉原の方が可哀想なのに、何でここで私が泣くんだろう？」でも泣けてきたんですよ」と言うから、僕は「それは自分のずるさじゃないか」と言っただけ、そのままの演技で本番を撮ったんですよ。あそこ、彼女は良かったですね」

結局杉原は桜井にふられる形でホテルから出る。ここで脚本には、杉原がやりきれない感情を爆発させて叫ぶ場面が書かれていた。

「でも俺と窪塚が作ってきた杉原は、叫ばないと思っただけですよ。きっとこの状況を受け入れるだろうと。撮影前日に、そう感じたんですよ。その日、窪塚は休みでした。僕がいらないと思っただけ、彼がどう感じているかはわからなかった。ところが撮影当日、彼の方から寄ってきて「このシーン、必要ですかね？」と言うんですよ。窪塚もまったく同じように感じていた。その時は僕と彼の気持ち、かなりシンクロしていたと思いますね。一緒に映画をやれていると感じました」

行定監督は、これまでローバジェットの仕事を作ってきた。初めて東映のメジャー映画を撮り上げた感想は？

「東映の人に、完成してから「ありがとうございませぬ」と言われたんです。映画監督がそんなことを言われるとは思っていませんでした。その喜びは忘れませぬ。これからはメジャーもインディーズも何でも撮ってやるという気持ちで、やっていきたいですね」

# 個と個を結びつける必然

映画「GO」では、在日韓国人の若者杉原が、歴史やイデオロギーが崩壊した時代のなかで、既成の価値観や形骸化した制度に縛られることなく、自分の道突き進んでいく姿が描きだされる。彼の父親秀吉は、在日朝鮮人でマルクスを信奉する共産主義者だったが、三年前に突然、墮落した資本主義の象徴であるハワイに行くと言いだして、国籍を朝鮮から韓国に変えた。そして、韓国人となった杉原は、ハワイではなく、民族学校から日本の普通高校に進学する道を選んだ。このドラマでは、そんなふうな未来に対する選択肢を広げていく杉原の視点を通して、日本の社会が異化されていくことにもなる。

映画の原作は金城一紀の直木賞受賞作だが、小説と映画ではスタンスに違いがある。

小説では、韓国人と日本人との境界を独自の視点でどこまでも突き詰めることから、世界が広がり、印象的なドラマが紡ぎ出される。DNAをめぐる日本人論、ジャズやクラシック、スプリングステインなどの音楽、ラングストン・ヒューズやマルコムXの名前

やメッセージが、境界に多面的な光を当て、揺さぶりをかける。物語には「長いお別れ」の引用もあるが、疎外されたコミュニティのなかで、対立しながらも心の底では通じ合っている若者同士の関係を、ハードボイルド・タッチで描く部分には泣ける。ヒロイン桜井の父親が、黒人やインディアンをアメリカン・アメリカン、ネイティブ・アメリカンと呼びながら、中国人や韓国人に偏見を持っているところには、痛烈な皮肉が込められている。

もちろん映画にもそういう要素は盛り込まれている。しかし、映画の方は、境界よりも登場人物たちの個性や繋がりを通刺さるポップなセンスで描くことに比重が置かれている。たとえばそ

れは、杉原の家族の関係である。小説では、境界をめぐって向こう側からあの手この手の鋭い揺さぶりが繰り返されるが、映画は、極端に言えばこの家族の在り方そのものを日本の社会にぶつけている。

父親の秀吉は元プロボクサーで、杉原が悪さして警察につかまると、警官が度肝を抜かれるほど息子をポコポコに殴り、「今回も家裁行かなくて済んだぞ、感謝しろありがとうは？」とそうぞぶく。母親の道子は、家出を切り札にして凶暴な父親を手なづけ、杉原とその仲間たちをガキ扱いし、有無を言わせない。杉原は母親には頭が上がらないし、父親にはポコポコにされっぱなしだが、しかし暗黙のうちに、彼らに

導かれ、支えられ、広い世界へと踏みだしていく。荒っぽい関係ではあっても、彼らは必然によって結びついている。

歴史やイデオロギーといった基盤もなく、消費社会に組み込まれた家族から確実に失われていくのは、家族を構成する個と個を結びつける必然だろう。消費社会は画一化された幸福のイメージをばらまき、家族は、内なる必然によって家族であろうとするのではなく、イメージを生きることで家族であるとする。しかし、どっちを見ても同じ画一的な幸福は、自己を相対化し、現実を自覚的にとらえる視座をもたらず外部を消し去り、閉塞していくしかない。桜井の父親は海外経験も豊かな教養人に見えるが、その言葉にはリアルな外部を感じとることはできない。

「GO」は、国籍や民族の境界に揺さぶりをかけるといふよりは、個と個を結びつける必然をダイナミックに描くことによって、閉塞した社会に揺さぶりをかける映画なのだ。





小説では、韓国人と日本人との境界を独自の視点でどこまでも突き詰めることから、世界が広がり、印象的なドラマが紡ぎ出される。DNAをめぐる日本人論、ジャズやクラシック、スプリングステインなどの音楽、ラングストン・ヒューズやマルコムXの名前

おやじみたいに在日2世、3世がきちんとかたづけねえから俺たちがはじけられねえじゃねえか、といった意味のことをタクシーのなかで怒鳴るクルパーこと窪塚洋介に、邦画界における行定勲の憤懣と決別の意志を讀んでしまった。邦画をつまらなくしたのは、制作条件の酷さによる映画の肉体の貧しさを、もっともらしい文学性によって抽象的にカムフラージュしようとした親の世代である。その発想の生真面目なだけの貧困ぶりゆえに、多くの若い観客は邦画を見限ったのである。したがって、自分は「在日」という重いテーマを扱いながらも、ぜったいに文学的な逃げはしないのであり、率直に映画そのものとして面白いものを作るのである。そんな監督の姿勢が、クルパーというキャラクターの表現に見えてくるのだった。

実際、地下鉄でのスーパー・グレイトキーン・レース(一)での疾走とバスケ部でのブルース・リーばりの飛び蹴りで始まるクルパーの物語は、窪塚洋介のスタイリッシュな見え方に行定勲のMTV的な編集の意匠もあいまって、



いちいちがコミックの一枚画のようなマテリアル感に満ちており、「在日」周りのゆゆしき文学性などまるでとりつく島もない感じの快調さなのであった。そして、当然ながら物語は、クルパーとその仲間たちにふりかかる差別や偏見のエピソードを点描してゆくのだが、行定は映画的な処理の妙によって、型どおりの「在日」にまつわる表現の暗く深い淵にはまることを回避する。民族学校での鬼教師の総括と自己批判の時間も、先輩のタワケの指紋押捺のくだりも、さらには親友・正一の悲惨な死をめぐるエピソードさえも、一種劇画的な料理によって不必要な深刻さは拭きされ、「GO」の娯楽映画としての潔癖さをキープし続けるのであった。

ちょうど柴咲コウ扮する桜井が、クルパーと一緒に流れ星を見たり雪のイブを過ごしたりする恋愛のお恥ずかしい紋切り型を念入り且つシャイにはぐらかしてまわるのにも似て、あたかも行定勲はこの作品がアリガちな文学的なこわばりを持つことに徹底した羞恥心を抱いているかのようである。そんな本作が、にわかにウエットにこわばりそうな雰囲気醸すのが、離別して朝鮮で暮らしていた兄弟の死に山崎努扮する秀吉が泣き沈むくだりなのだが、行定はクルパーにこの定番感に満ちた「在日」の悲しみを爽快に蹴飛ばさせるべく、わざわざこうした場面を描いていたのだった。このタクシーでのクルパーの反論と公園での秀吉との勝負ま

## 映画的なマテリアル・ボーイに国籍はない

作品評②

文・樋口尚文

でのくだりは、「GO」のエンタテイニングな明晰さの面目躍如たるころだろう。現実の「在日」の悲しみはこんなものではない、という硬直した批判もあるかも知れないが、行定勲は一見もつともらしくそちら側に踏みこむことを誠実さと解さず、主人公を映画的な皮相さの域におさめることで、逆に「在日」差別を問題化する通俗を退けている。つまり、行定は「在日」映画ではなく「青春映画の主人公として、クルパーを無条件且つ陽性に肯定するのである。いきのいいダイアログでやはり窪塚洋介を魅力的に見せていたドラマ『池袋ウエストゲートパーク』の脚本家でもあった宮藤官九郎は、ここでも清潔なフイクシオン感を全篇に漂わせて好ましい。そして、山崎努十大竹しのぶの芸達者カップルはもとより、窪塚洋介十柴咲コウは、新鮮ながらこのフイクシオン感を体現する華があって、抜き差しならないキャストイングであつた。

INTERVIEW

原作者 **金城一紀**



「GO」以前から  
「GO」以降の世界へ

読者、そして映画「GO」の関係者からも絶賛された小説「GO」、作者の金城一紀氏に話をきいた。  
ケンカはお強いんですか？(笑)  
「もう30歳過ぎなんで、うんと言うのは恥ずかしいんですが(笑)、父からボクシングを習ったんで」  
連戦連勝？



かねしろ・かずき ●1968年生まれ。コリアン・ジャパニーズ。小説現代新人賞受賞で作家デビュー。初の書き下ろし長編「GO」が直木賞を受賞する。新作は10月発売の「レヴェル・シヨン No.3」。

「そんなことないですよ。あ、でも高校の時は負けなかったかな」  
ケンカに勝つコツは？

「高校の時は、まさに『GO』と同じで、名簿に朝鮮なんとかか中学出身って載っちゃったんで、次々ケンカを売られてました。やらなきゃ苛められるし、偏差値40くらいの学校で、一年の時、校内のケンカで人が死んだりしてたので、こりゃ、やっとなきゃ、と」

判断が冷静ですね。

「ケンカする時は、いつも冷静です。興奮もしない。小説読んで、この著者、暴力体験ないだろうなと思うのがある。頭で書いているから痛みが伝わってこない。その割りに陰惨。本当にやられるとすごく痛いんですよ、当たり前だけど」  
小説には、《在日》のグループに

杉原を誘う、高校の同級生が出てきます。これも体験談ですか？

「高校じゃないですが、大学の時。でもそういうの、すつごく嫌。群れるのが嫌だった？」

「ほんつとに嫌ですね。民族学校から日本の高校に行った時も売国奴って苛められたし、共産主義教育や金日成主義教育に疑問を持ったのもあって、

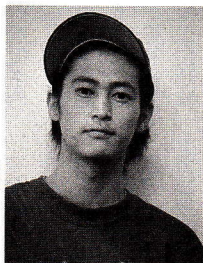
おじが北朝鮮で死んだり、父親が苦しんでるのを見て、つくづく組織は人を幸せにしないと、思いましたよ」

でもその考えを著すには、かなり覚悟を要したんじゃないですか。

「できあがった時、母親がビビってたんですよ(笑)。本の中でいろいろ遊んでるから。まあ、いろいろな皮肉を込めて書いたんで、在日の中では、あのヤローってなっ

「GO」完成披露舞台挨拶

会場は静かな熱気に包まれていた。9月20日、銀座・東映会館。舞台上に並んだ行定勲監督、山崎努、窪塚洋介、柴咲コウ、大竹しのぶ、そして原作者の金城一紀のそれぞれの言葉を、若い女性が大半の観客は静かに聞き入った。主演の窪塚洋介は次の様に語った。「僕がこの作品と出会って、自分でなんだろうとか、自分の生きてる世界ってどんなだろうとか、そういう事を考えてるうちに、日本人であることにバリバリプライド持って、誇りを持ってよう



撮影/雷永智

主演の窪塚洋介

になってきました。この作品はみんなにとっても、何かのきっかけになればいいなと思います。自分の事とか、家族の事とか、友達の事とか、彼女の事とか、いろんな事、何でもいから何かのきっかけになれば最高です。(映画の中で)広い世界を見ろっていうセリフがあります。広い世界を見ろっていう事は、たくさんの価値観を持っていることで、その中から自分が一番気持ちいい価値観をつかみとれて事です。自分がどう思うかという事を考えなきゃと思います。みんなが自分の事を考えて、自分が生きてる世界の事を考えたら、もって絶対いい世の中になるから。そういう願いも込めて、今日、楽しんでいってください」。

てるみたいですよ。でも本当のことだから、知ってる人は親父がワイロを払う所で笑うんですよ」  
私小説的な部分を書くには、見たくない事実にも向き合わなくてはならなかったのでは？  
「それでも20世紀中に書いておきたかったんですよ。若い人たちに、21世紀からは全然違う道を歩んで欲しかったから」



自分のために、ではなく？  
「無論、売れて金持ちになりたい気持ちもあつたけど(笑)。書くことにあまり意味を持たせたくないんですけど、今の若い人がアイデンティティに困らないように。僕、高一の時に迷走したんですよ。日本の学校に入学して、国籍も朝鮮籍から韓国籍に変えたのに、何ひとつ状況が変わらなくて。その時片っ端から読んだ在日関係の文学や思想書、哲学書は役に立たなかった。特に映画は日常から掛け離れ過ぎてた。いずれにせよ、内省的求心力はあっても、迷ってる人

を遠くへ飛ばしてあげるだけの遠心力がない気がしたんです。だからこそ、遠くに飛ばしてあげられる小説を書きたかった」

自分の在り方に迷った人なら、誰しも共感できる話かなとも。

「最終的には、在日だけに終わらずそこに行つてほしい。読んでくれた人の身体と脳に化学反応を起こして、軽く背中を押す感じになればいいなど。GO!じゃなく」

21世紀、具体的に変わってきた手応えを感じますか？

「わからないです。ただ映画にあって本当によかったと思う。影響力が全然違うし今まで在日の子が胸を張って映画館を出てこれる映画ってなかったんですよ。『GO』以降は変わると思う。そういう意味では、窪塚(洋介)くんが杉原を演ってくれただけで大成果！」

映画の杉原はイメージ通り？

「僕の書き方って頭の中の映像を文章にする、ノベライズ的な方法なんですけど、その最初の映像と近かった。山崎努さんや大竹しのぶさんもイメージ通りですごく嬉しかった。大ファンなんで(笑)。撮影を見に行った時、山崎さんが僕に『例のダブル(足を踏みなが

らの左パンチ2発)だけ3発はまずいかな』と聞くんで、『闘争本能が強い人は3発でも4発でも入れますよ』と言うと、『じゃあ3発にする』って(笑)。窪塚くんには知らせずに本番でやったみたい(笑)。あの二人の闘いには、お互いの世代を背負せてる。だから一人称が俺たちなんです」

宮藤官九郎さんの脚本はいかがですか？ 小説より民族に対する想いは薄くなっていますか？

「小説と別ものだと思うんで、壊して貰つていいんです。今回よかつたのは、行定(勲)さんも宮藤さんも『僕たちが在日のことよくわからない』と言つてたことで、無理にわかるうとして絞るより、いっそその方が心地いい。監督とはかなり話し合いましたけど、もともとの考えも近かつたようで、『グッドフェローズ』や『トレインズポッドティンク』みたいなリズムの映画にしたいと思つたら、行定さんも同じだったと後で知りました」

撮りたくなりましたか？

「やりたいです。実はもう、『GO』の撮影の柳島克己さんにはお願いしてるんですよ(笑)」

川端康成の不朽の名作を現代にみごとに甦らせた。

# 新・雪国

後藤幸一監督作品 原作 笹白明(廣済堂文庫)

エロス  
究極の男と女の愛のドラマ

女は、生きるため芸者になった。  
男は、雪に誘われて山ふところに来た…。

製作・笹白明事務所・株トラム・株ケイエスエス・南プロダクション12

キャスト

奥田瑛二

菅木夕子

南野陽子

吉行和子

あき竹城

坂上二郎

主題歌  
「雪の花」  
作詞・笹白明  
作曲・加藤登紀子  
唄・坂本冬美

全国ロードショー!

10/6(金) シバタ文化映画館

10/6(金) 三条東映(三条市)

10/27(金) 新潟シネ・ウインド

11/17(金) シネマチャオ(長岡市)

11/17(金) 名古屋・キジタホール

12/1(金) 大阪・千日会館

東京・札幌・九州他順次上映